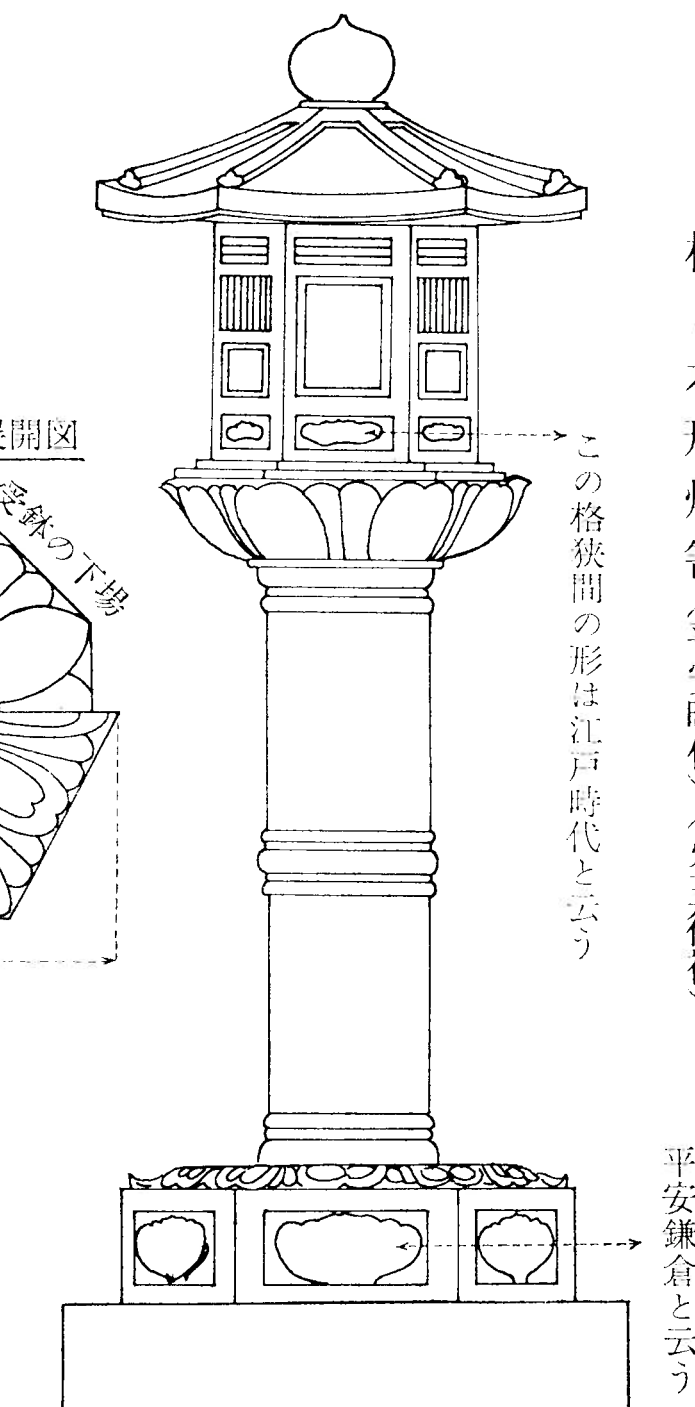
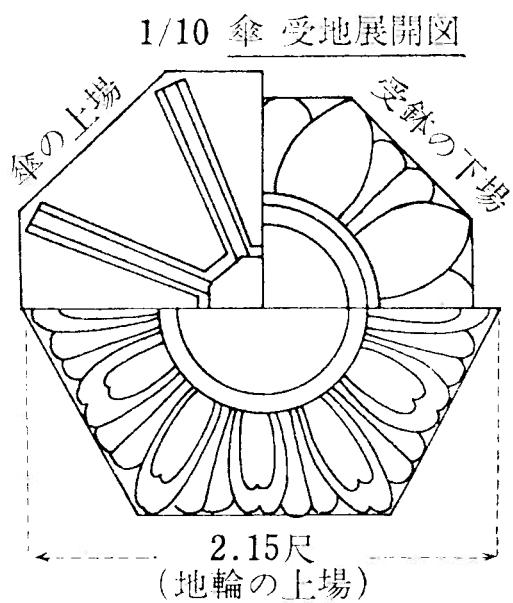
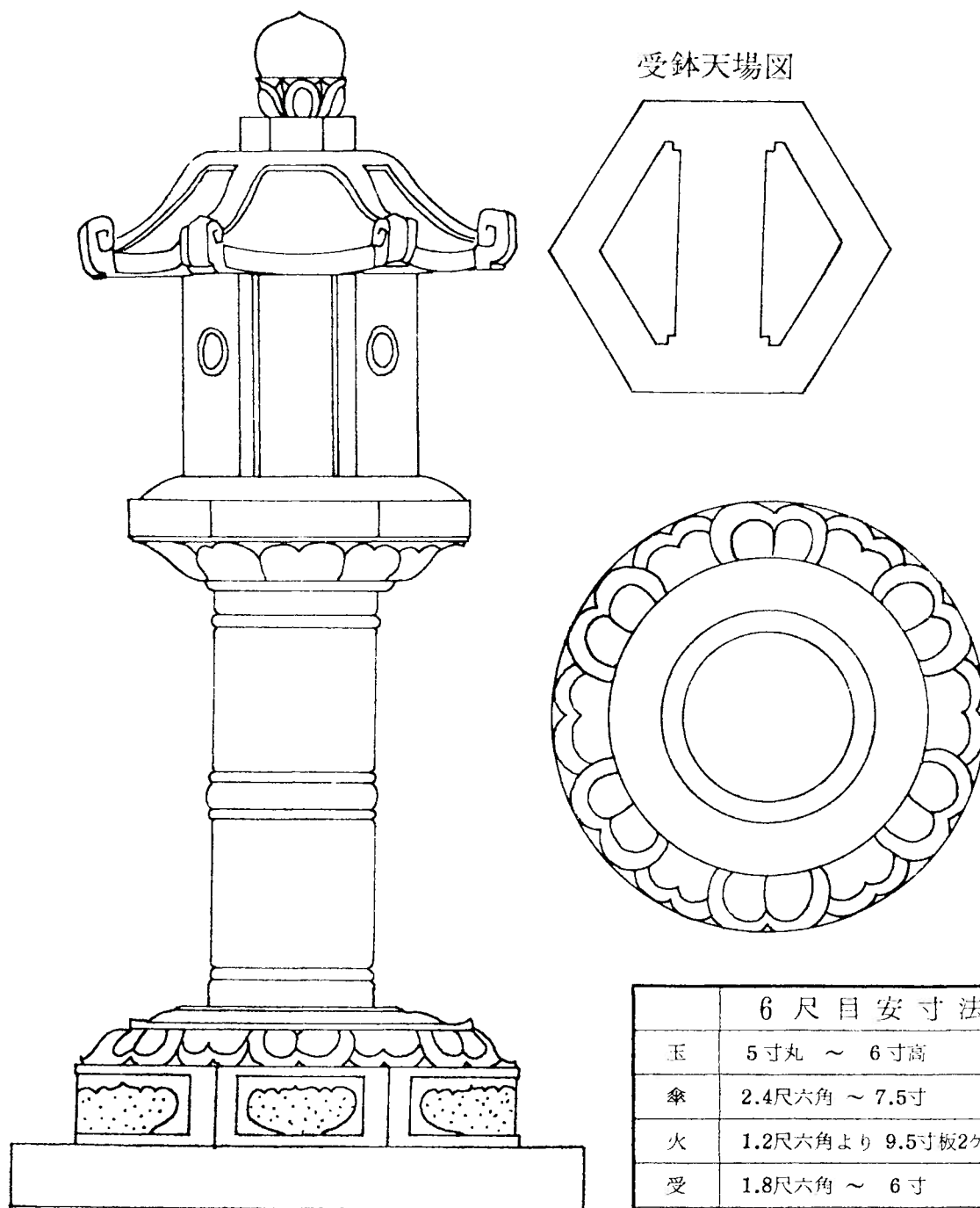


柚ノ木形灯籠(平安時代)(火玉後補)



	径	高	備 考
玉	0.45	0.47	丸
傘	2.20	0.60	八角の平より
火	1.20	1.10	四方火口
受	1.90	0.50	八角平より
柱	0.90	2.75	胴張り
地	2.15	0.70	六角剣先より
土台	2.70	0.50	四 角

平等院形 6 尺圧縮図



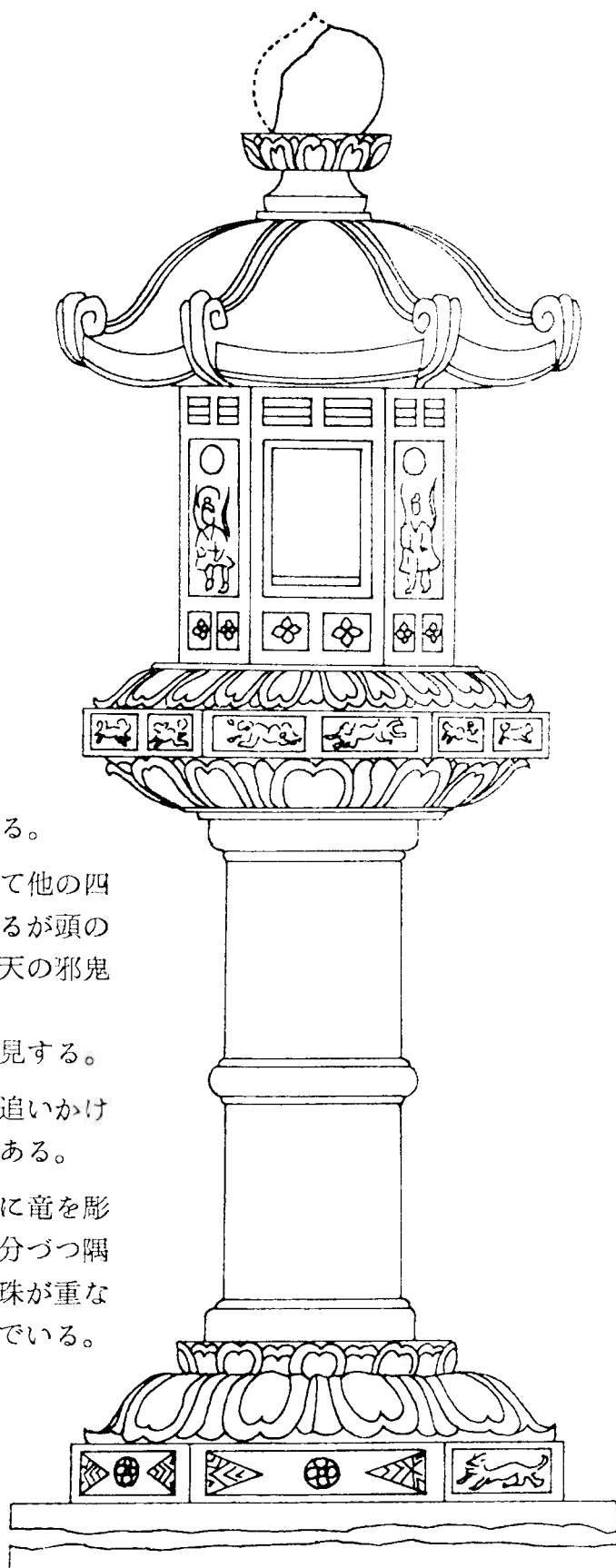
※ 平安時代の作（地のみ）他は後補と云う鎌倉時代の河桁御河辺神社石灯の傘石の手法と類似点が多分にあり、どちらが前後か判らぬが後補の作も鎌倉位か。

6 尺目安寸法	
玉	5 寸丸 ～ 6 寸高
傘	2.4 尺六角 ～ 7.5 寸
火	1.2 尺六角より 9.5 寸板 2 枚
受	1.8 尺六角 ～ 6 寸
柱	9 寸丸 ～ 2.15 尺
地	2.3 尺丸 ～ 8 寸
土 台	3 尺角 ～ 8/4 四ツ組

	径	高
玉	0.80 ^尺	1.00 ^尺
傘	2.70	0.86
火	1.40	1.37
受	2.40	0.88
柱	1.05 ^尺	2.70
地	2.55	0.85

上記はあらましの寸法であるが現代の形の比率と若干相違がある。

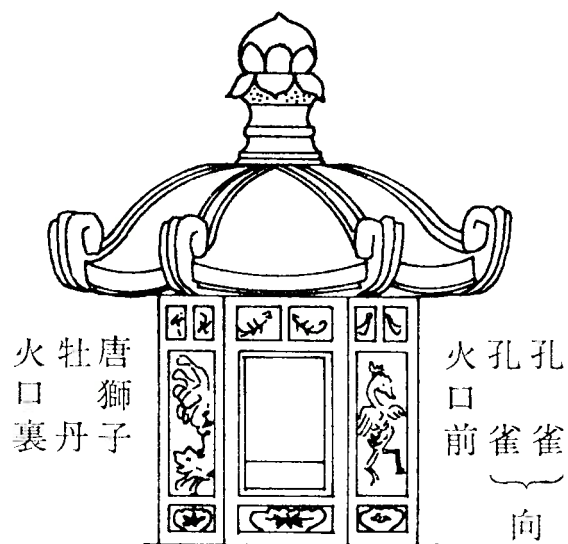
- ※ 宝珠は半分欠損している。
- ※ 火袋は前後火口となって他の四面と四天王が彫ってあるが頭の上は丸窓となり足下は天の邪鬼がない。
石灯の彫刻には時折散見する。
- ※ 受鉢側面六方共獅子の追いかけっこをしたのが彫ってある。
- ※ 地輪の側面は半分三面に竜を彫り他の三面は剣菱を半分ずつ隅からのぞかせ中心は宝珠が重なり合って光背でかこんでいる。



橘寺石灯（鎌倉時代）

正は後補と云う

般若寺石灯（鎌倉時代）（柱と傘後補）



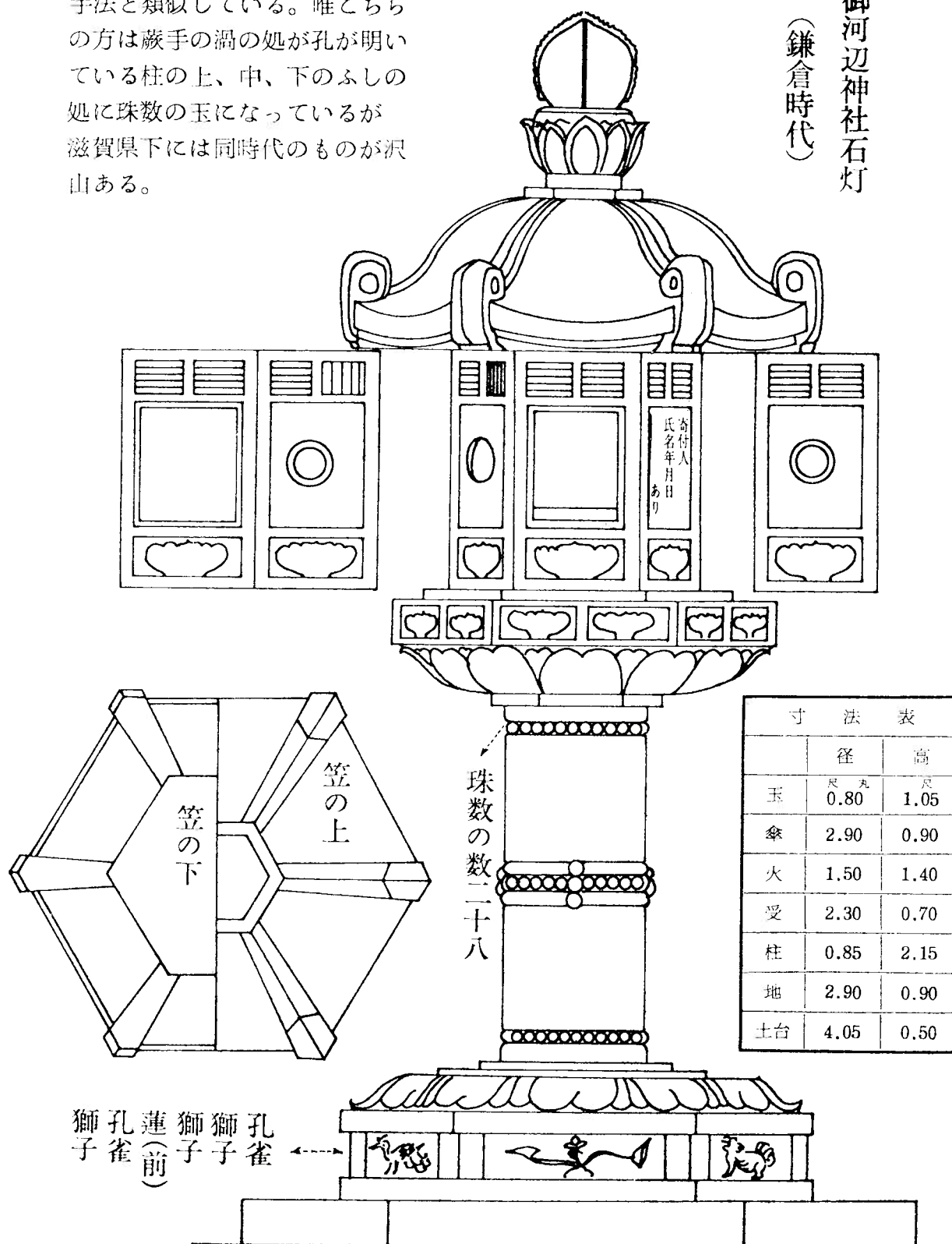
- ※ 火袋、受の格狭間の模様は全部違っている。
- ※ 柱が立っている地輪の上場の隅は蓮の実の穴が彫ってある。
- ※ 火袋の六角の1面9寸故9尺物と推定する。

孔雀 孔雀
火口前
向い逢っている

蓮の実の穴がある

※ 宝珠の火焰が四方にある。傘石は宇治平等院前の石灯の傘石の手法と類似している。唯こちらの方は蕨手の渦の処が孔が明いている柱の上、中、下のふしの処に珠数の玉になっているが滋賀県下には同時代のものが沢山ある。

河桁御河辺神社石灯
(鎌倉時代)

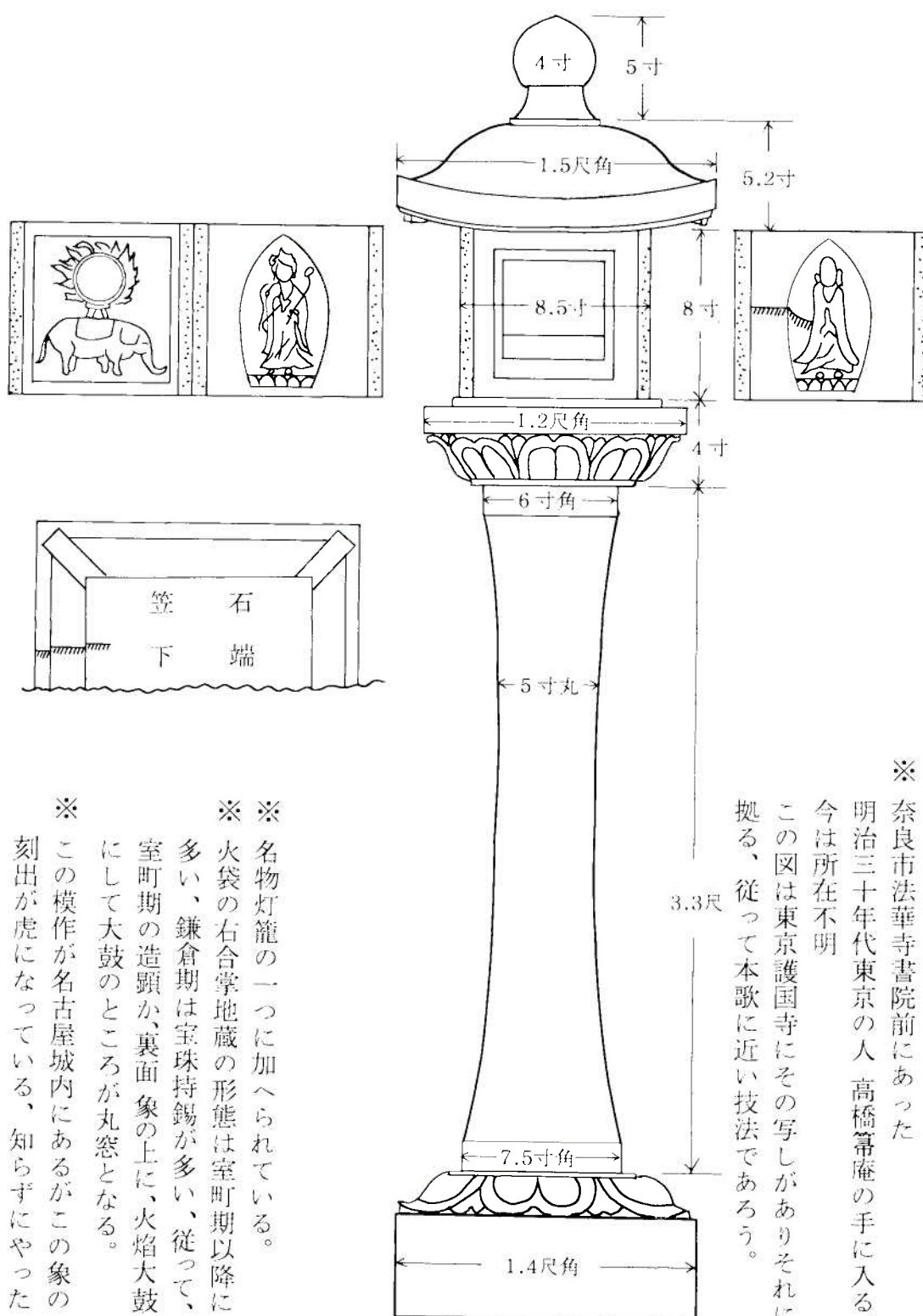


法華寺形灯籠 1—10 図

※ 奈良市法華寺書院前にあった

明治三十年代東京の人 高橋箒庵の手に入る、
今は所在不明

この図は東京護国寺にその写しがありそれに
拠る、従って本歌に近い技法であろう。



※ 名物灯籠の一つに加へられている。

※ 火袋の右合掌地藏の形態は室町期以降に
多い、鎌倉期は宝珠持錫が多い、従って、
室町期の造頭か、裏面象の上に、火焰大鼓
にして大鼓のところが丸窓となる。

※ この模作が名古屋城内にあるがこの象の
刻出が虎になっている、知らずにやった
ことか、意識的か……………

※ 竿石中程くびれた技法、珠光形や紹鷄形
に看取される。

手水鉢について

古来より、神社、仏閣用にはじまった手水鉢も、茶道の發達により庭園用に利用されて数多くのものが遺っている。

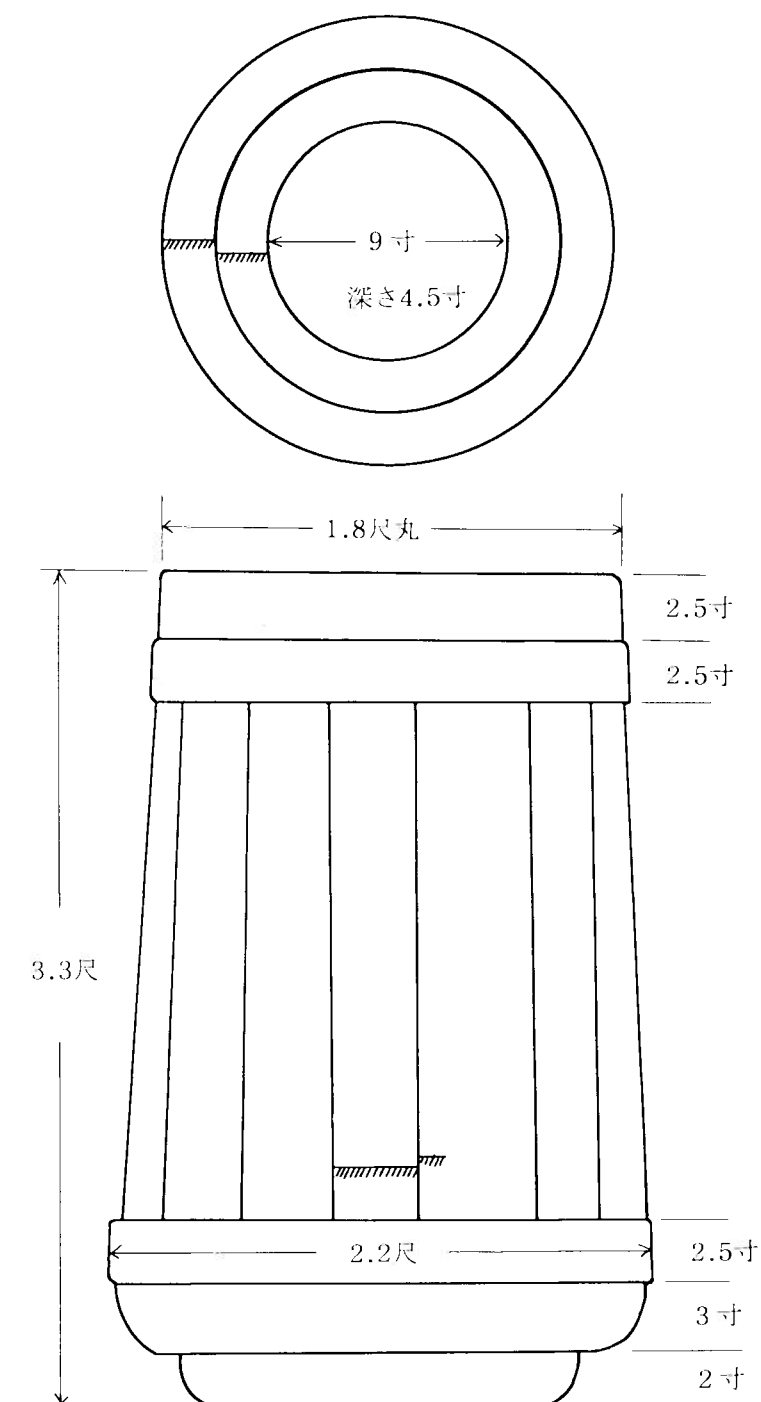
特に、風趣に富んだものとして、廢石を利用して出来ている有名なものとして、伽藍水鉢、宝篋印塔の今を逆にして穴を穿ったものや、角形灯籠の今を逆にしたもの、多層塔の塔身を利用したもの、方形、円形、団形のかつては石造物の一部であったものに穴を穿って手水鉢として利用されたものや、自然石の山形の石に穴を穿って蹲踞としたものから、有名な知足の水鉢、布泉水鉢、銀閣寺水鉢等、加工本来の技術を駆使して出来たものまで、枚挙に暇がないものである。

筆者も先人の故智に習って二、三の廢石利用の手水鉢と穴掘機發達の時代に適した家紋水鉢を載せてみた。

六地藏灯籠の前

南宗寺 袈裟形手水鉢 利休遺愛の品と云ふ

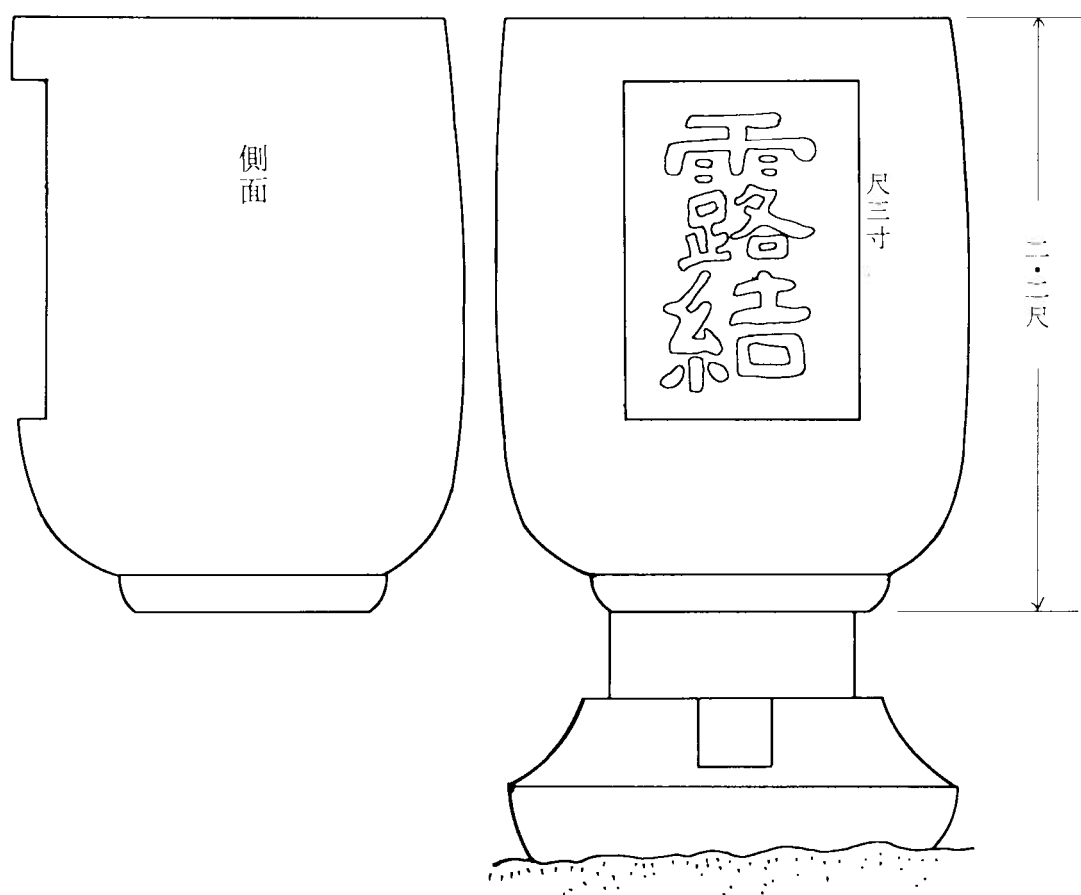
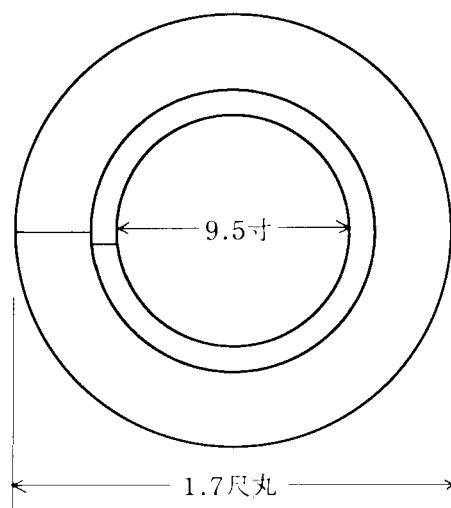
※ 大阪府堺市南旅籠町



※ 砂岩系にて風化が激しい。
※ 立筋七条である鎌倉時代の宝塔の塔身を
反転して利用されたと伝えるが鎌倉時代の
宝塔の塔身にこの様な長い遺品を知らず。

孤篷庵 露結の手水鉢

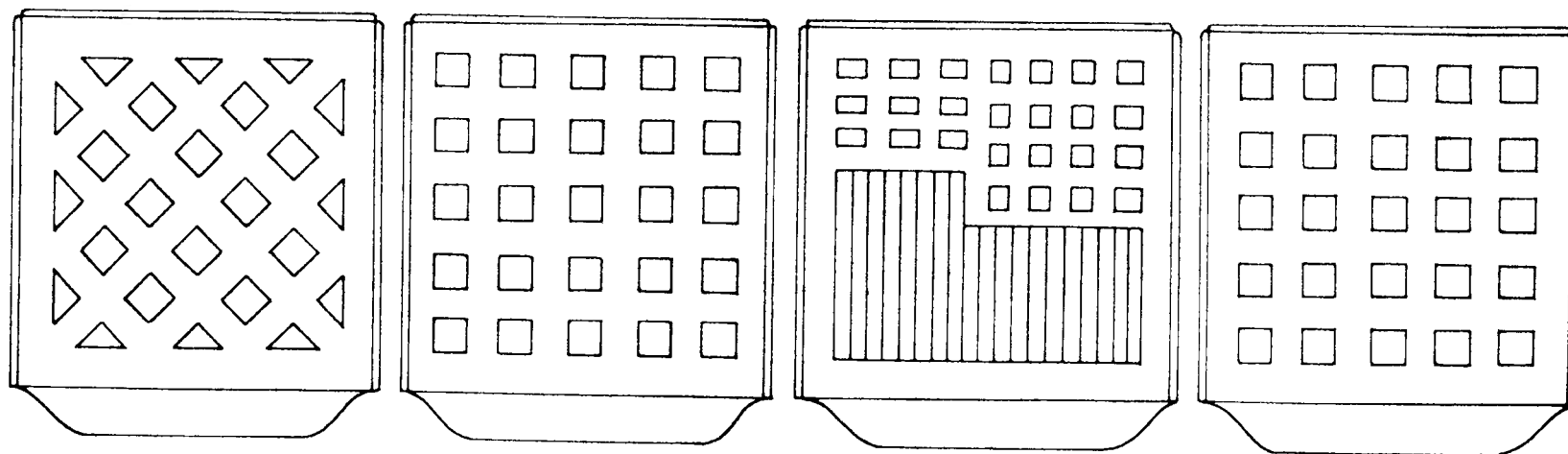
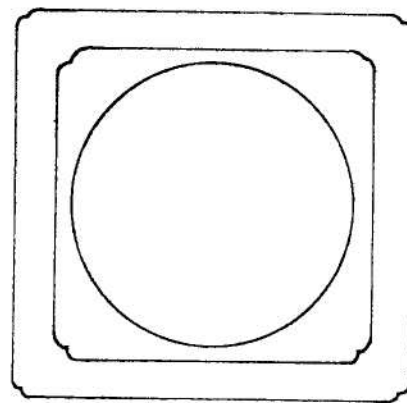
※ 寄灯籠の前にある



※ 京都市紫野大徳寺町

銀閣寺形水鉢

※ 高さは 角寸法の一割増しとしてある。

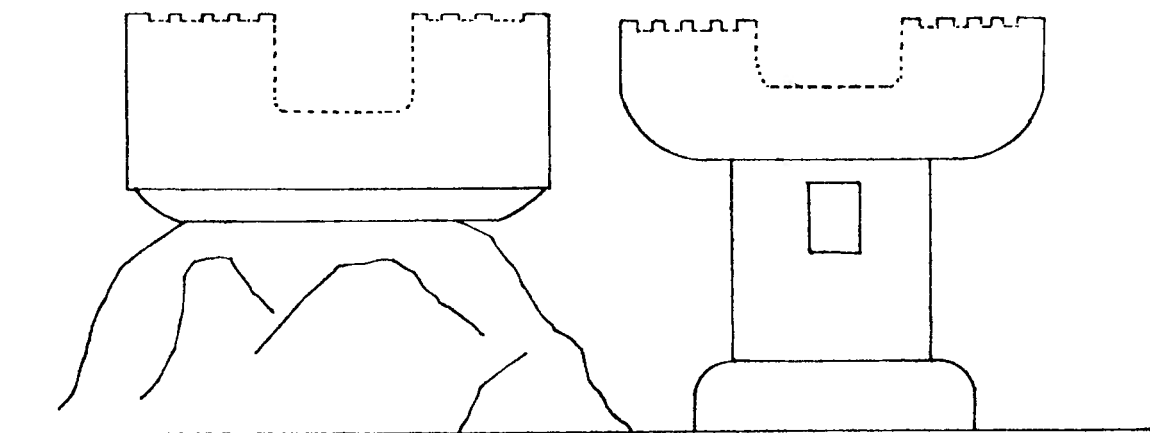
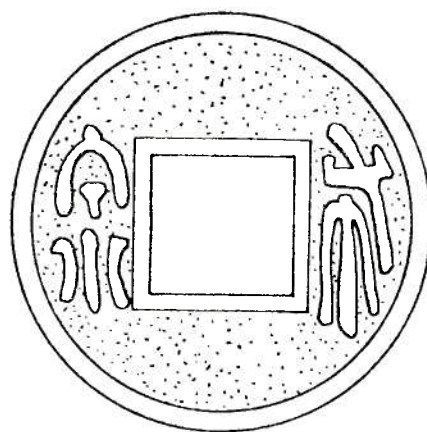
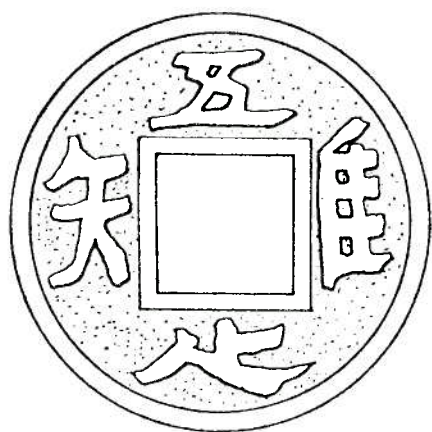


前

知足の水鉢

布泉水鉢

(銭形とも称す)



※ 埴に書いてある故必要寸法に応じて比率を出して作る。

※ 台石は材石に応じて勘案する。

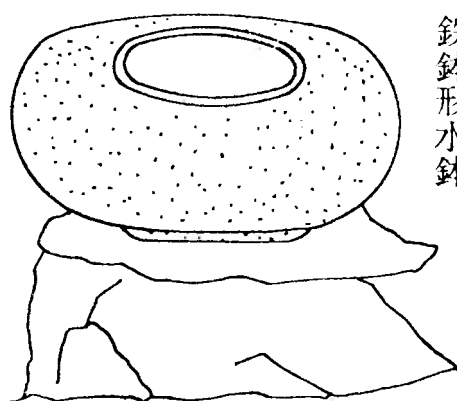
寸法基準表

	径	高
鉄鉢	径の	40%~50%
菊鉢	径の	55%
夏目	径の	110%
露結	径の	90%

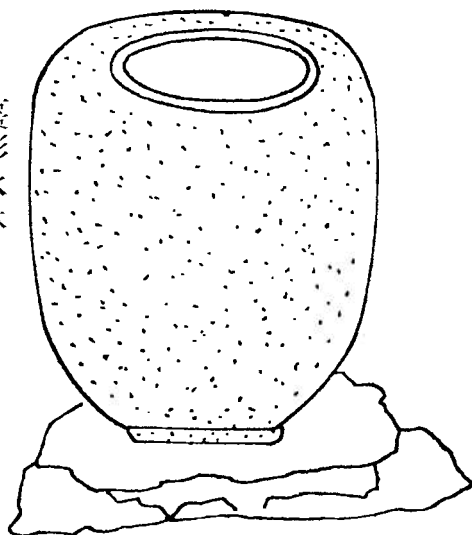
露結形水鉢



鉄鉢形水鉢



棗形水鉢

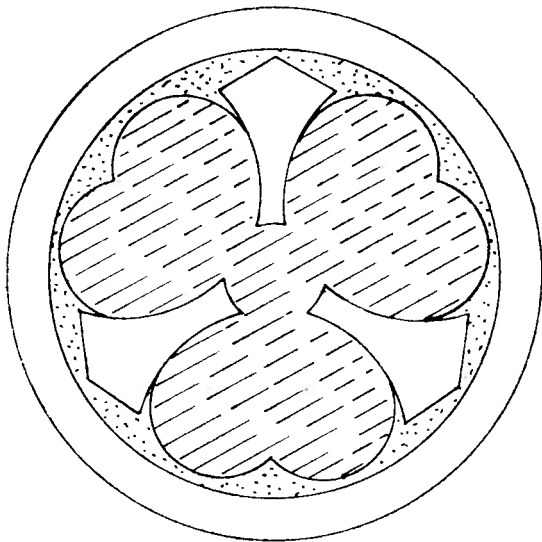


菊形水鉢

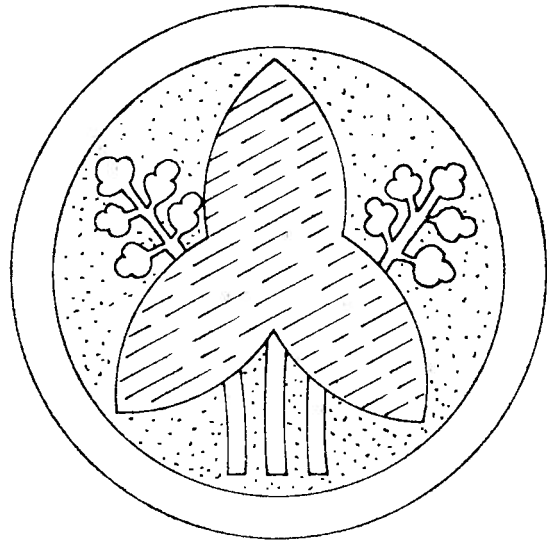


上記適当比率であるが粗材の都合と出来上り恰好の
このみにて若干の相違ある。

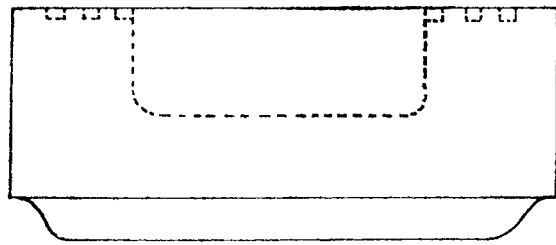
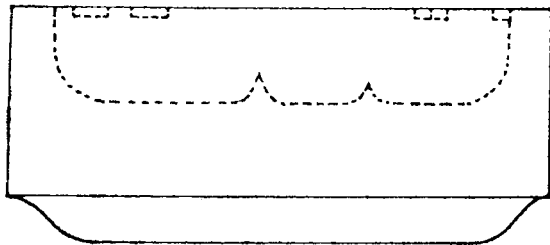
家 紋 水 鉢



剣かたばみ

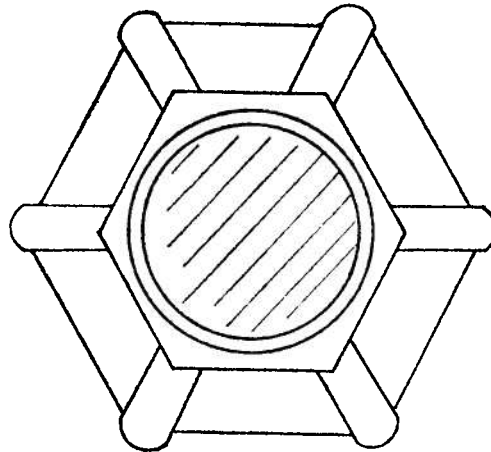


おもだか

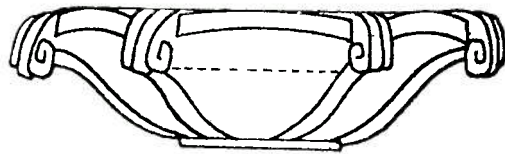


- ※ 斜線の処を水穴として掘り込む
- ※ 穴掘り機械の発達は上記紋様の穴掘りを可能にした。
- ※ 紋様穴の一例を示したのであって好みによって幾多の紋の様子が勘案出来ると思う。

灯籠部分の手水鉢図

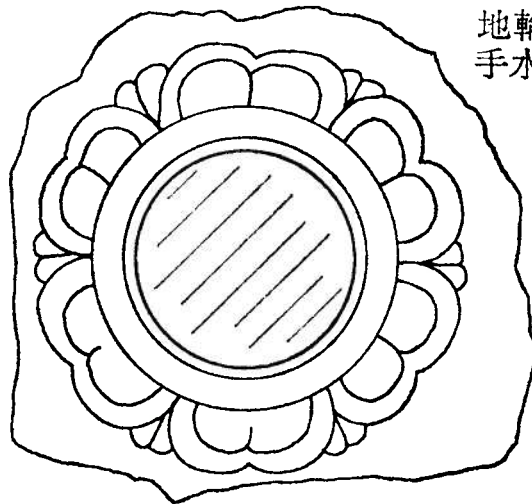


傘石廃物
手水鉢

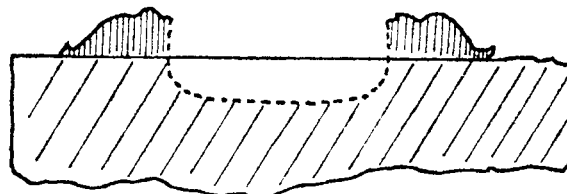


側面

※ 灯籠類を製作するとき六ヶ石より成る関係上材石の不揃いが生じた場合どの工場の隅によく未完品がごろごろ見受けるものであってその場合の利用法を手水鉢に求めてみた。



地輪廃物
手水鉢

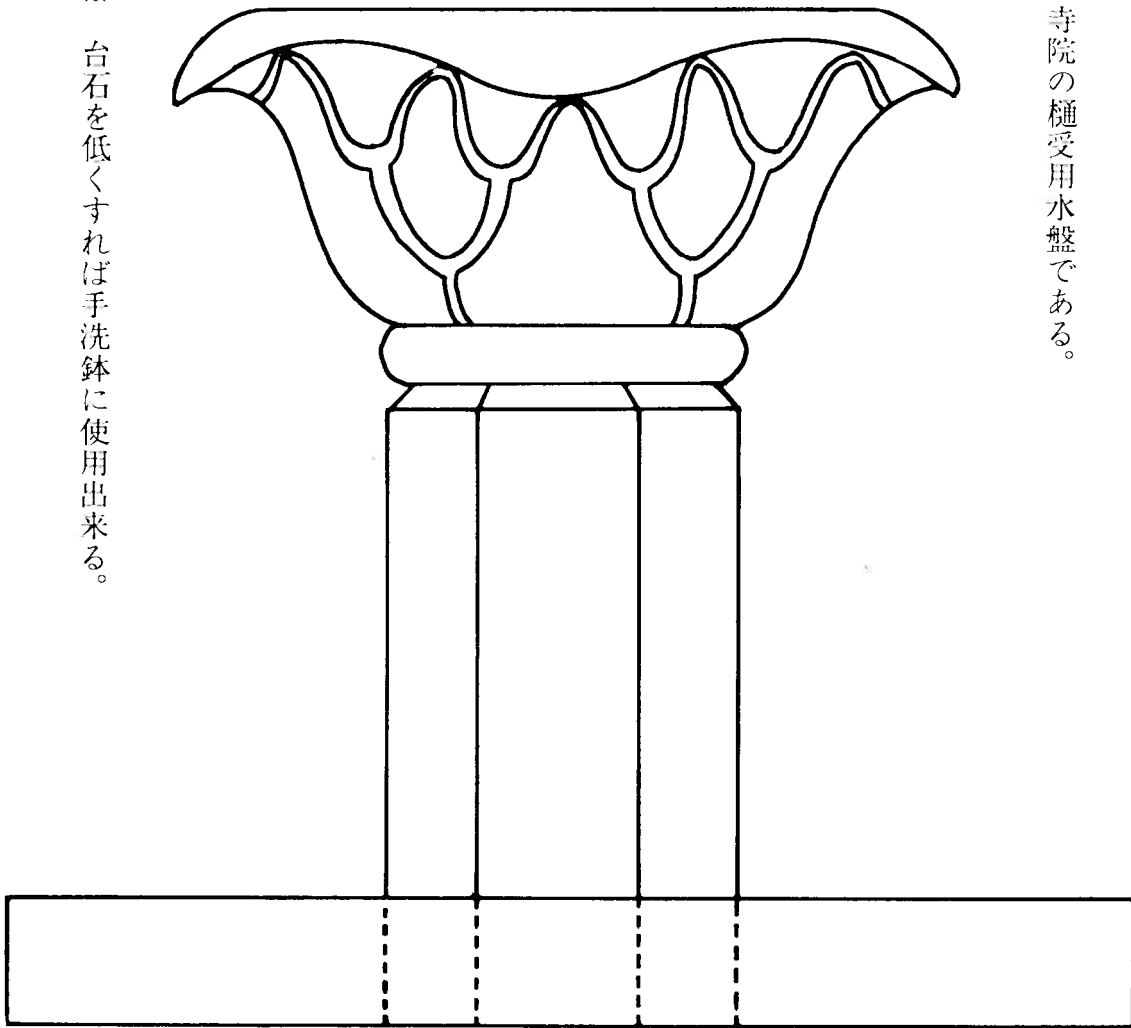


断面

蓮の葉手水鉢

※ この図は寺院の樋受用水盤である。

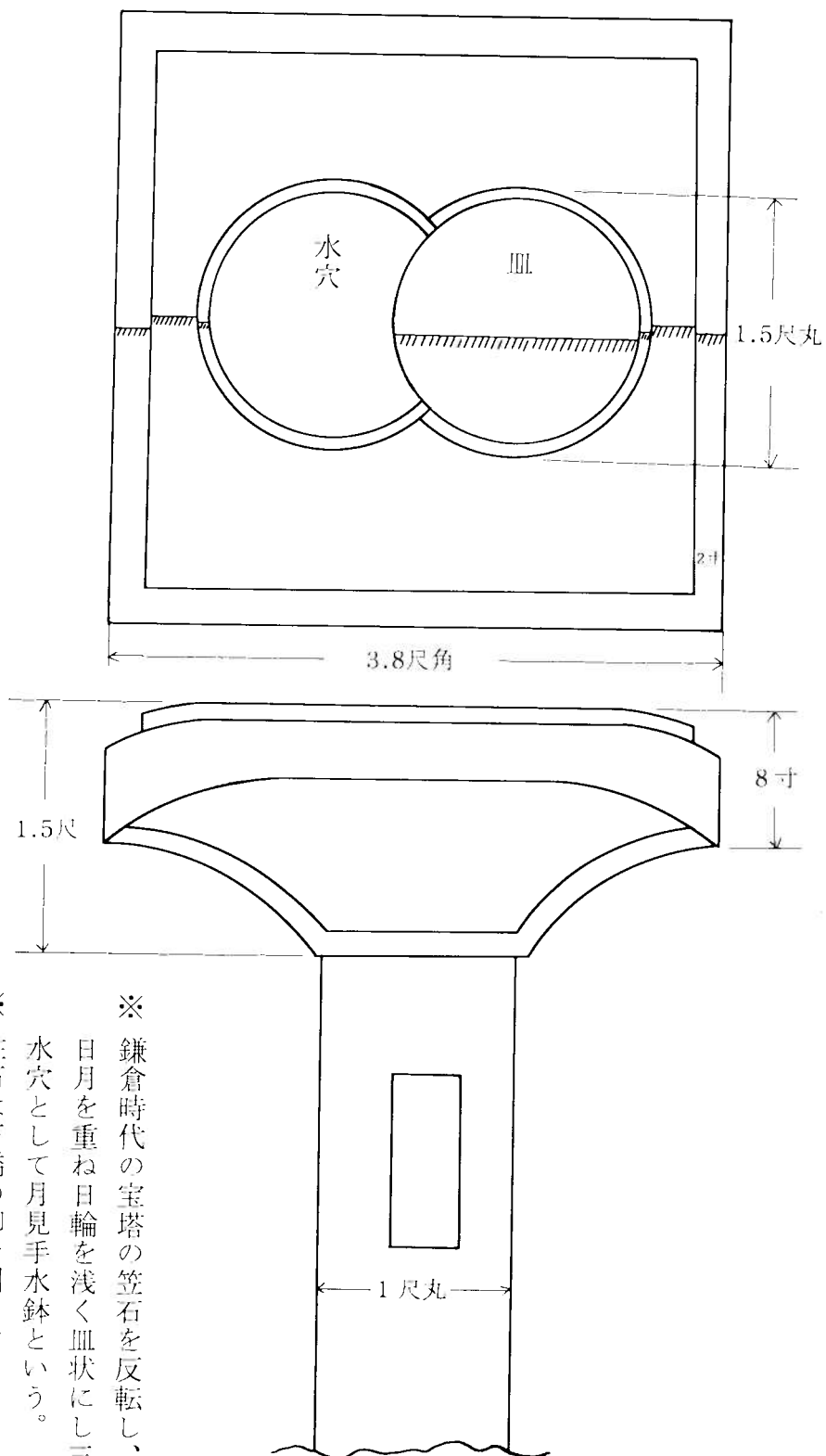
※ 台石を低くすれば手洗鉢に使用出来る。



月見形手水鉢

※ 滋賀県大津市

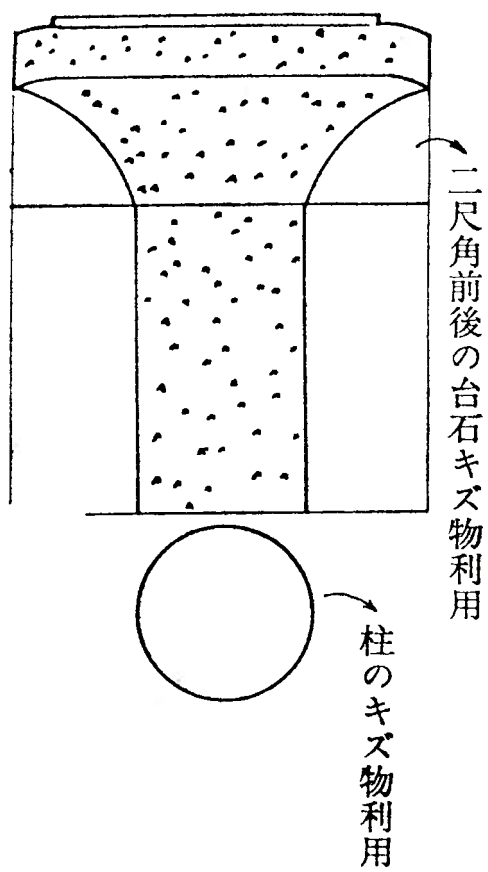
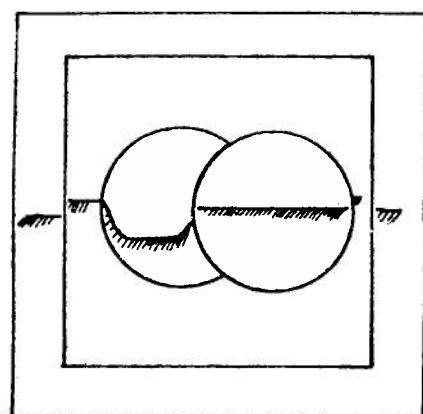
来迎寺



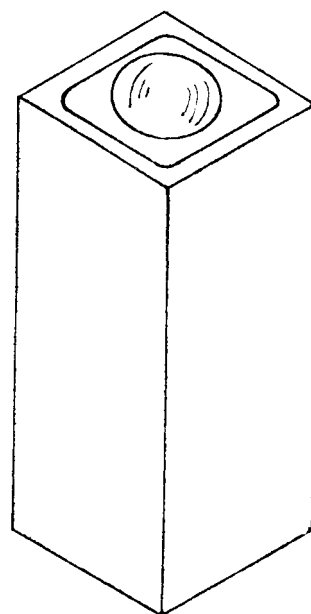
※ 鎌倉時代の宝塔の笠石を反転し、そこに日月を重ね日輪を浅く皿状にし三ヶ月を水穴として月見手水鉢という。

※ 柱石は石橋の脚を利用する。

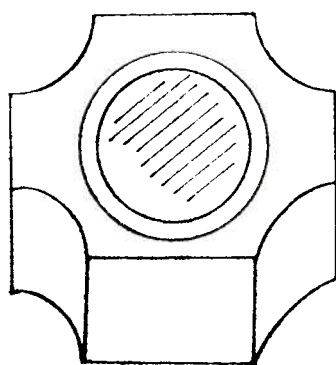
来迎寺 月見水鉢



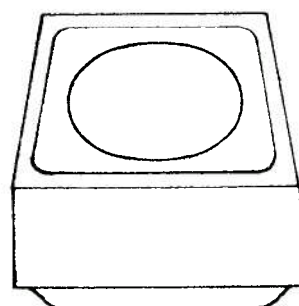
石碑類 部分の手水鉢図



※ 竿石不良材の
利用手水鉢



※ 台石三ツ角欠けた場
合の利用手水鉢



※ 台石下部の欠けた
利用手水鉢

仏像の種々

〔如来像〕（釈迦如来、薬師如来、阿弥陀如来）

すでに悟りを開いた仏で、その像も出家解脱した形をとり装身具もあまりつけず、体の特徴をよくあらわす。

〔菩薩像〕（弥勒菩薩、観音菩薩）

仏陀となる資格をそなえているもの、すなわち出家以前の姿故貴人の姿に似せてにぎやかに身を飾りたてている。

〔天部像〕（四天王、伎芸天、吉祥天）

四天王は仏法を守護する武人の姿、伎芸天、吉祥天などは女性像である。

〔明王像〕（不動明王など）

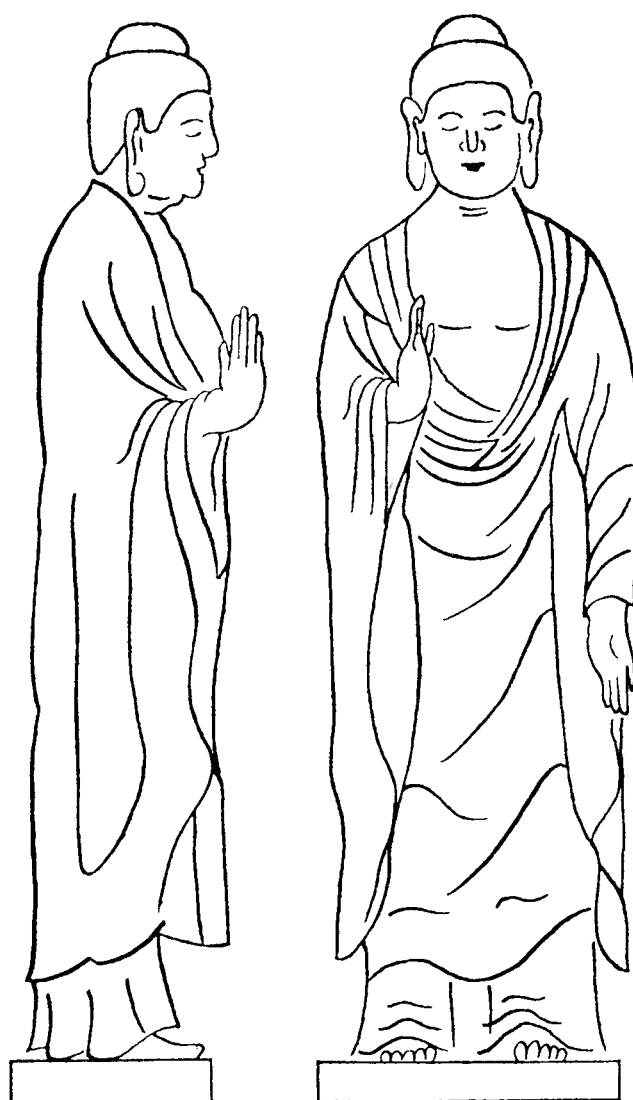
悪魔を折伏し仏教に帰依させるもので、憤怒の形相をそなえたものが多い。

※ 仏像を大きく分けると上記の四種相である。

観音菩薩	宝髪宝冠	蓮花開掌姿	百ヶ日供養
勢至菩薩	宝髪宝冠	合掌姿	1ヶ年供養
阿弥陀如来	仏相螺髪	法界定印又は上品下生印姿	3ヶ年供養

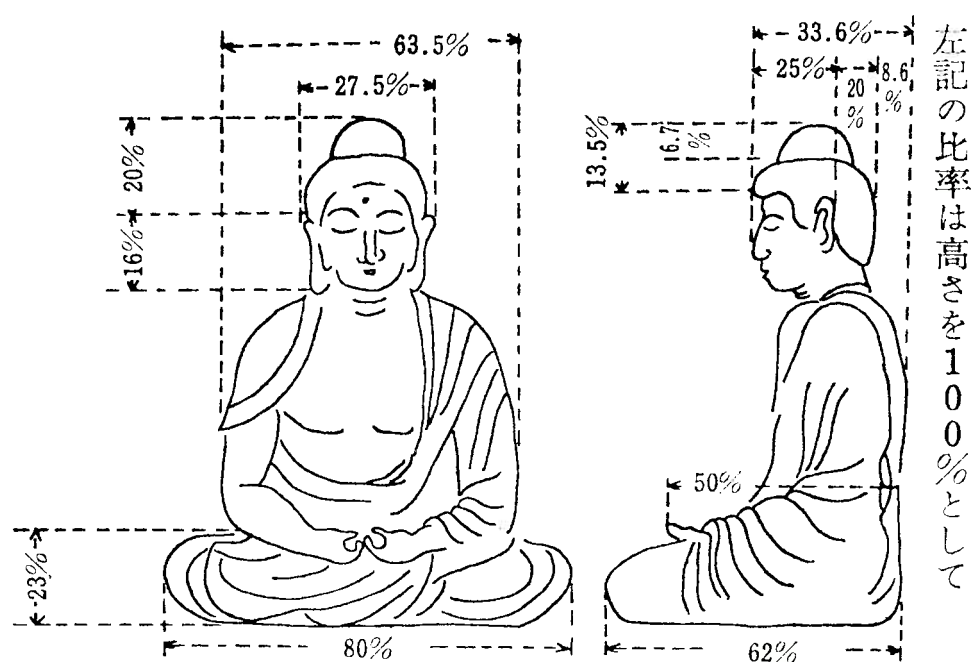
※ 筆者企業の従業員物故者の供養堂安置の御本尊仏は上記の三尊仏を船形光背にして一石で作り上磨きの仕上りにて蓮花石の上に安置してあります。

立像の古仏と現今石製品の寸法比例



	仏名	高	前巾	奥行
古仏の寸法例	東大寺観音像	100%	約 31%	約 24%
	唐招提寺十一面観音像	100%	" 28%	" 17%
	東大寺阿弥陀如来像	100%	" 30%	" 27%
	西大寺釈迦如来像	100%	" 28%	" 22%
現今の石造寸法例	お地蔵さん	100%	31%	23%
	観音像	100%	35%	25%

※ 像容によりそれぞれ若干の相違はあるが上記を目安として才出しすべきである。

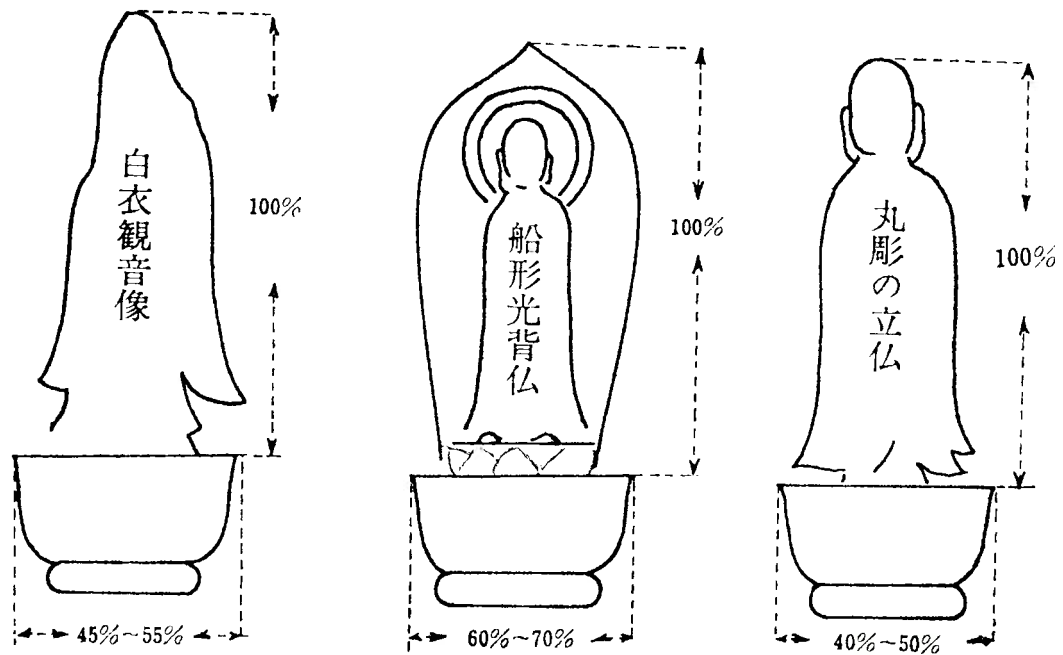


古い坐仏の寸法例

仏名	高	前 巾	奥 行
仁和寺本尊阿弥陀如来像	100%	約 87%	約 66%
興隆寺薬師如来像	100%	〃 85%	〃 63%
吉野大日寺大日如来像	100%	〃 74%	〃 56%
東大寺俊乘堂愛染明王像	100%	〃 90%	〃 51%
浄教寺大日如来像	100%	〃 75%	〃 52%
西大寺文珠菩薩像	100%	〃 74%	〃 63%
現在の石製品の寸法例	100%	〃 80%	〃 62%

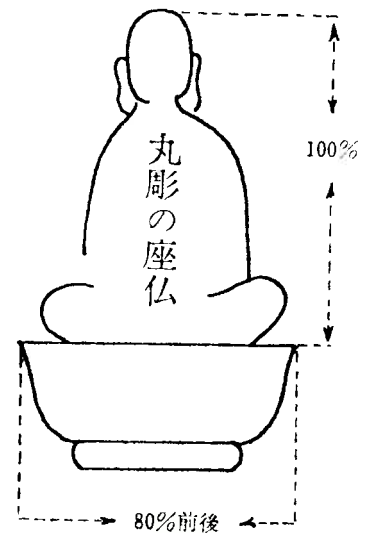
※ 古仏の寸法比率は写真判断でありますので約としました。
 像容により比率の相違はありますが、現今の岡崎石像製品の類似点が発見出来るとおもう。

仏像用蓮華台各種寸法比率表

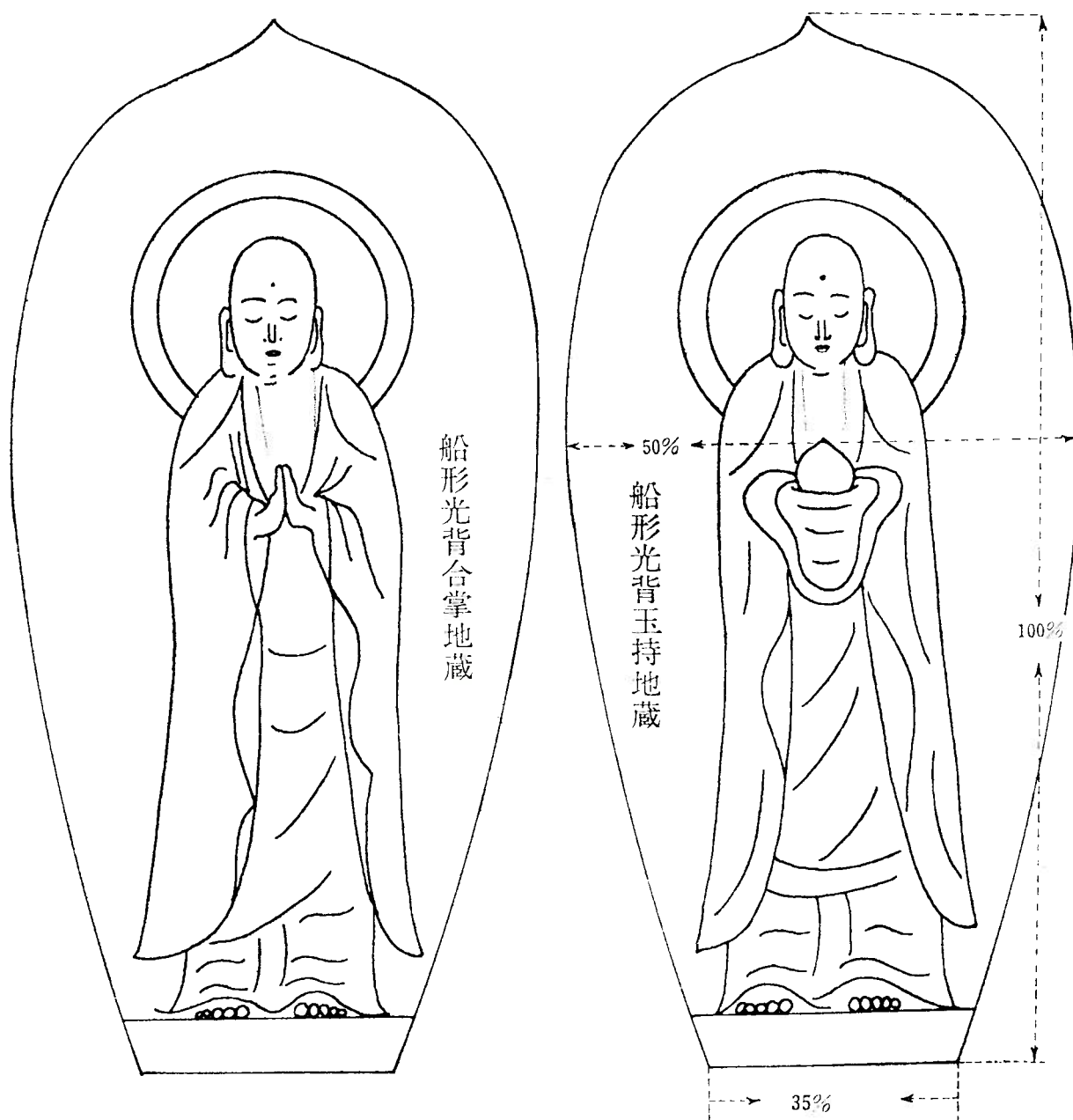


※ 仏像の乗る蓮華台の寸法の割出しは、上記の比率でよいが予算の都合で少し大きめの方が恰好がよい。

※ 厚みは 径の45%~50%
スリンの無い場合 40%前後



船形光背地藏寸法比率表

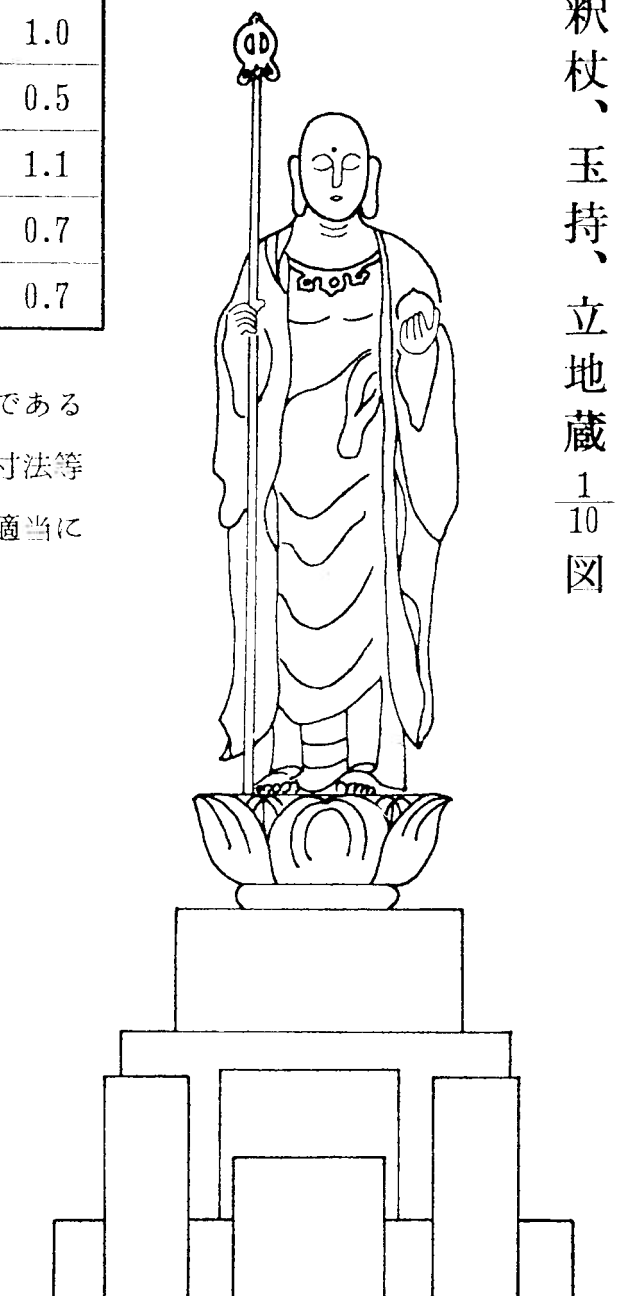


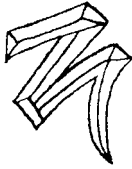
3尺立仏台石適當寸法

	前 巾	奥 行	高
丸蓮華	^尺 1.2	^{尺 九} 1.2	^尺 0.5
上 台	1.3	1.3	0.7
中 台	1.8	1.8	1.0
下 台	2.4	2.4	0.5
花 立	0.4	0.4	1.1
水 鉢	0.8	0.4	0.7
香 立	0.7	0.35	0.7

※ 台石の寸法は一応の目安であるから予算に応じて恰好、寸法等又は前飾りなどの増減は適當にする。

釈杖、玉持、立地藏 $\frac{1}{10}$ 図





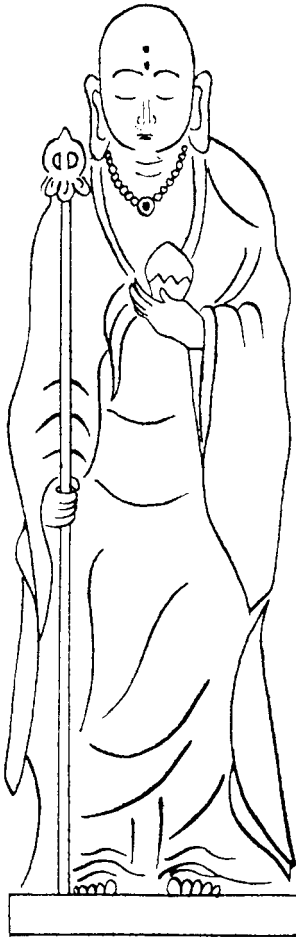
梵字は地藏の種子である



子
安
地
蔵

(一人抱き、二人抱きの尊容あり定義はない)

六地蔵像容 No. 1



延命地蔵（壺体で建てる一般的地蔵尊である）
（合掌姿もある）



不休息地蔵



讃龍地蔵

※ 教典により像容も数種あり

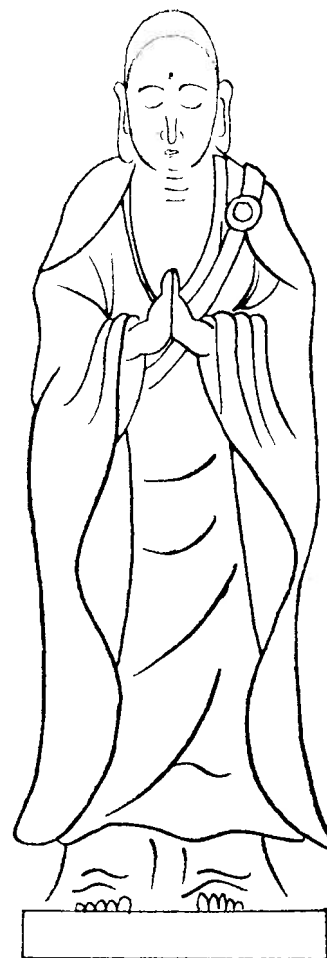
六地藏像容 No. 2



護讚地藏

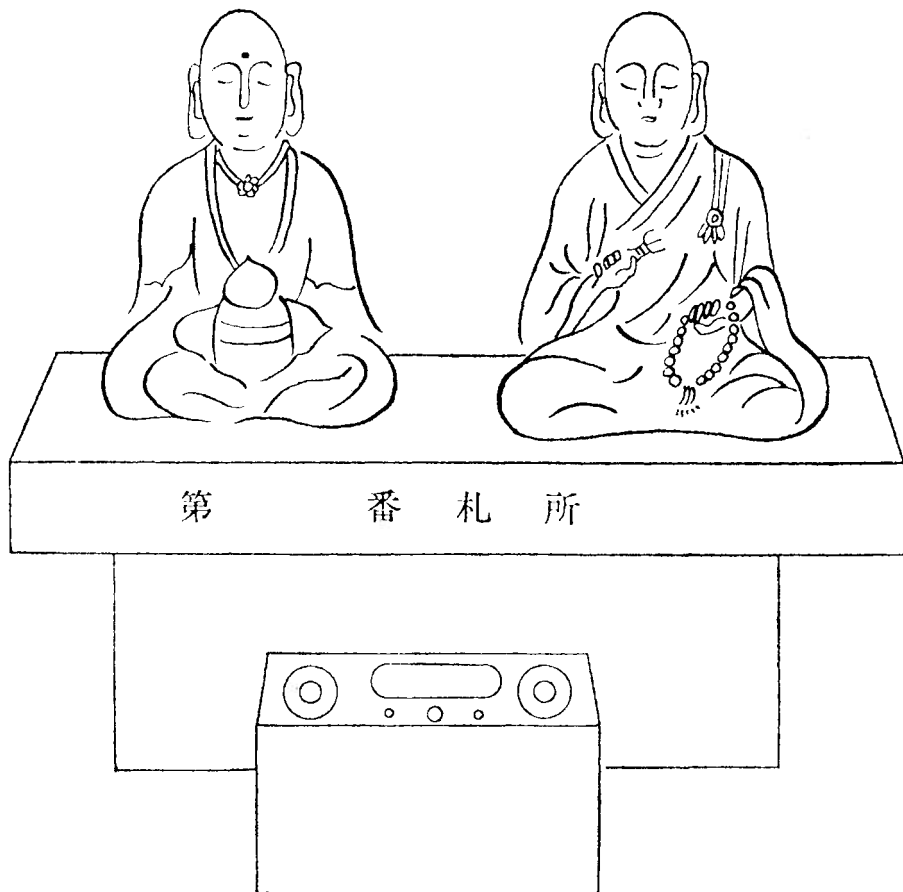


辨尼地藏



破勝地藏

弘法大師八十八ヶ所建立



※ 八十八ヶ所巡りの石仏を作る場合、大師が巡拝した。四国の八十八ヶ寺の御本尊と大師像を併座して建立するのが本来であるが此の図は地藏にした。これはその略した恰好図である。

※ 台石、前飾り等は予算に応じればよい。

観 音 像 由 来 (略記)

- 聖 観 音 一般に観音様と称される仏である。すべての観音様の元と云われている。
- 千 手 観 音 手が千本眼が千個あると云われている。千手の変化によって諸願が成就されるという。
- 十一面観音 頭部に十一の小さな首が出ている。十の功德があると云われている。
- 如意輪観音 手は六本右足は立膝の姿の坐仏である。富貴資材威徳の悉くが成就すると云う。
- 不空羅索観音 異像が多くあるが、大方は三種類ほどあって像容は一面三目八臂が多い苦海に漂う衆生を救うと云われている。
- 馬 頭 観 音 頭上に白馬の頭を頂き、三面二臂一面四臂三面八臂等の像容がある。往時は武家の信仰が大であった。
- 准 提 観 音 六観音又は七観音の一つで一般に三目十八臂の坐仏が多い除災延命子宝が叶えられると云う。

※ 上記を七観音と云う

- 救 世 観 音 三十三身に応現して衆生の救済にあたられている。聖徳太子の信仰が深かったので後世の人は聖徳太子の化身と云う。
- 白 衣 観 音 頭の上から布を被った。女性的の姿である。三十三観音の一つである。

※ 三十三観音は、観音が化身して三十三の姿に変化して、それぞれの守護の働きをしたので三十三の名がある（現今、西国三十三ヶ所、板東三十三ヶ所、秩父三十四ヶ所）の百観音がある。

※ 施主から製作の依頼の相談を受けた時、願意をただして上記各仏の功德に添うよう配意すべきである。

聖観音像

※ 左手に蓮の花を持ち右手を開く



白衣観音像

※ 頭から布を被った女性的な姿



ここに仏陀の彫刻のないものは礼拝の意をなきすと云う。

不 動 明 王

※ 両牙を咬んで片目を開くと云うが数種の像容がある。

※ 明王には下記の如く五大明王がある。

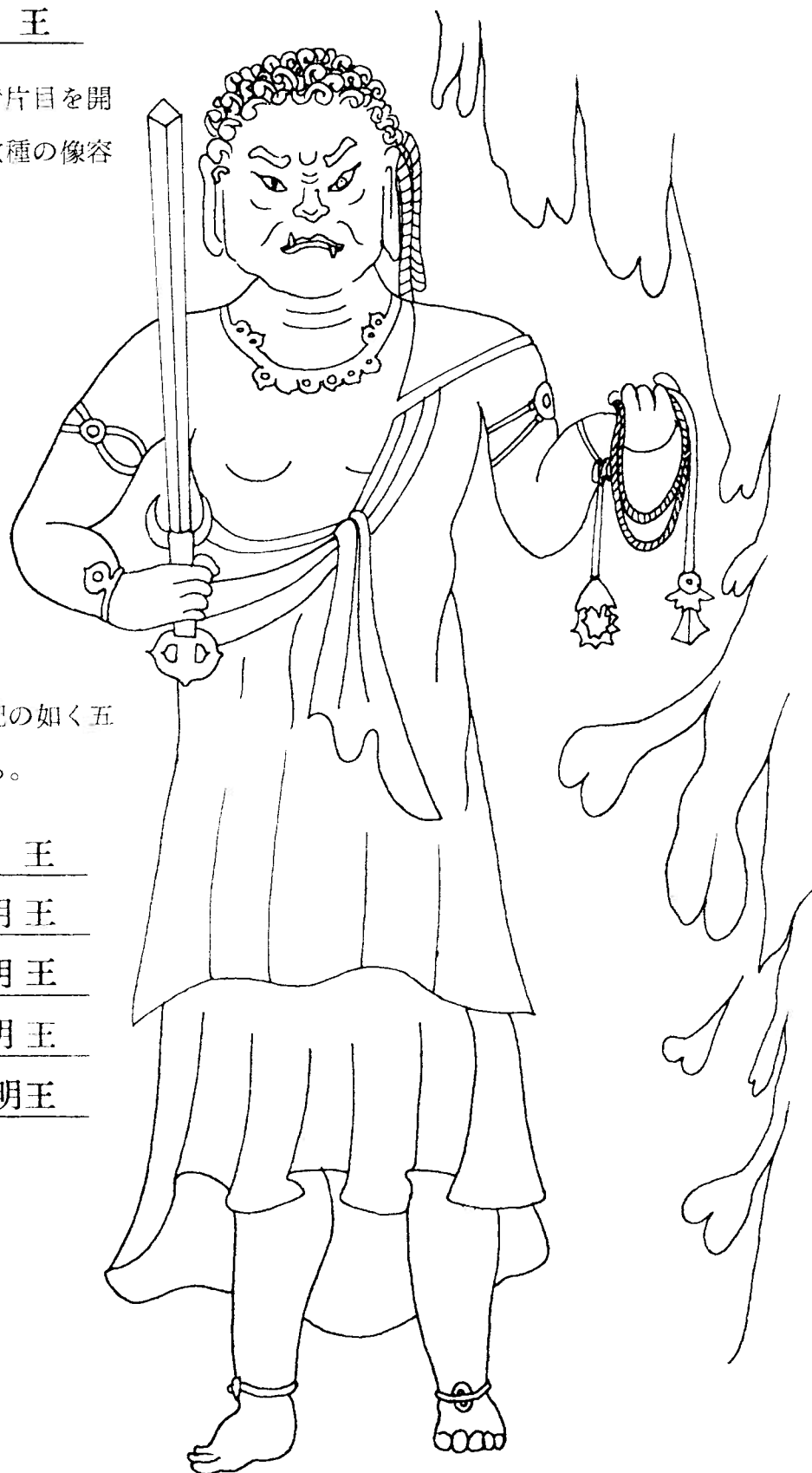
不 動 明 王

降 三 世 明 王

軍 荼 利 明 王

大 威 徳 明 王

金 剛 夜 叉 明 王



不動明王半迦像



あとがき

すべて物を作ると云うことは、嗜好とか見解とか判断の相違があつて一と口に律しきれないものがある。

石製品の製作においても一応の規矩と云うものはあつても細部に到つては各様の差違の生じるのは止む得ないことであつて、全体の恰好の上において支障さゝなければ、各人の感覚で作るべきであるが、あくまでも美的感覚を念頭に入れて製作上の向上を期すべきである。

何分硬い石を作るにとつて、商業ベースを度外視して仕事に打込んで了うことが間間あつて、気持ちよい後悔をすることが度々とあつたが、このような体験を一つ一つ重ねた辿りが観察力と判断力を養ひ、且又反射神経が助長出来るのであつて、この蓄積が向上への役立ちとなる。このようにして日々を迎へて足らざるを痛感しているが、そこに一つの共通点を発見して頂き、度々念願して纏めてみたのであるが、概念的なものとなり勝ちの裏をお許しを願います。

日本の美 石製品のみちしるべ

昭和四十七年九月一日 初版
昭和五十三年四月一日 二版
昭和六十年九月一日 三版
平成十九年十月一日 四版

著 者 塚 本 嘉 一

愛知県安城市根崎町西根二五八

印 刷 株式会社ヨシノ印刷

〒444-0924 愛知県岡崎市八帖北町一四―一五
電 話 (〇五六四) 二四―一二一八番

発行所 日本石材工業新聞社

〒444-0936 愛知県岡崎市上佐々木町鹿乗二一の三
電話代表 (〇五六四) 三一―二二〇〇番

不 許
複 製